

長善館

友の会報

令和8年3月31日
第7号

長善館と松下村塾



友の会会長

小原 秀一

「長善館友の会」の令和七年度に予定されていた事業（総会及び講演会、視察研修会、長善館史料館収蔵資料解説学習会、会報発行）も、皆さんの協力のおかげで無事に終了することができました。

大変ありがとうございました。



よく、「西の松下村塾、東の長善館」と幕末の私塾を比較されるのですが、吉田松陰が、長州萩城下の松本村（今の山口県萩市）の松下

村塾を経営するのは、安政四年（一八五七）二十七歳の時です。当時は、鈴木文臺六十二歳であります。しかも、吉田松陰は、安政五年に幕府によって投獄されるのでありますから、実質一年くらいしか松下村塾の経営をしていないことになるのです。

高杉晋作、久坂玄瑞などの有名な人物がいましたが、長善館のように、文臺、惕軒、柿園（教師）、彦嶽と代々館主が続いて、八十年くらいにわたって多くの門下生を育てた私塾は他にはないのではな

長善館史料館収蔵資料解説学習会

長善館史料館館長 横山文一

「長善館友の会」では、令和七年十二月六日に粟生津公民館で、収蔵資料解説学習会を開催しました。今年度は、私塾長善館初代館主鈴木文臺の扇面に書かれた書を取り上げ、参加者全員で鑑賞しました。

読み

一部皇清経解の書あり
頭従り讀みて舊汚を去り除く
二千餘年燕石を珍とす
今日始めて實と虚を知る
皇清経解を讀む 文臺

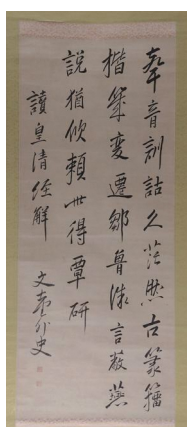
訳

一部の皇清経解の書籍がある。始めから読んでいって古くからの汚れ（まちがった読みや解釈）を真の玉（正しいもの）と信じて宝としてきた。今日始めて（中国古典）の真実と虚偽を知った。

皇清経解は、清朝の考証学者阮元（一七六四～一八四九）の編集した叢書で、七十三家一八八の書籍を収める。全一四〇〇巻のこの書籍は経学（経書研究）の集大成であり、

一八二九年に出版されました。文臺がこの皇清経解を手に入れたことで、これまでの自分の解釈や考え方の間違いに気づき、以後の学問研究に対する姿勢や意欲に大きな影響を与えました。皇清経解を手に入れた年ははつきりしていませんが、一八五一年に皇清経解を詠んだ詩があります。「聲音訓詁久茫然古篆籀楷幾變遷鄒魯微言蔽燕說猶欣賴此得覃研 讀皇清経解 文臺外史」とあり、手に入れたのもこの年代（五十六歳頃）であろうかと思われま

す。そして、この年代以降に著書が多くなり、文臺の訓詁学、考証学を重視した学問研究が飛躍的に進んでいくこととなります。また、その研究成果が長善館のカリキュラムや指導方法などにも反映されて、一層充実した教育内容になるのです。



「讀皇清経解」

〈視察研修会①〉 故郷につながる今

吉田 愛美

このたび、ご縁をいただき初めて研修旅行に参加させていただきましたこと、心より感謝申し上げます。企画・運営にご尽力くださった事務局の皆様、そして日頃より長善館を大切に守り支えておられる長善館友の会の皆様に深く御礼申し上げます。このような学びの機会が、多くの方々の思いの積み重ねの上に成り立っていることをあらためて感じております。

の願いがありました。

長善館出身の偉人である高橋竹之介と大竹貫一の歩みに触れ、あらためて長善館の存在の大きさを実感いたしました。竹之介は長善館で培った志を胸に幕末の動乱へと向かい、厳しい境遇の中でも理想を追い続けました。その背後には彼を信じ支え続けた家族の姿がありました。貫一もまた、大河津分水路の実現に尽力しましたが、その背景には二百年にわたり洪水と向き合い続けてきた越後の人々

の願いがありました。偉業は一人の力だけで成し遂げられるものではなく、人と人とのつながりの中で育まれてきたものなのだと感じます。そして、その中心に長善館という学びの場があり、人を結び、志をつないできたことは、郷土にとって大きな誇りであると思います。

現在では東京に暮らしておりますが、今回の学びを通して、私の足元はやはりこの故郷につながっているのだとあらためて感じました。遠くにおいても、この土地の歴史や人々の思いの延長の中に自分があることを心にとどめながら、いただいた学びをこれからの歩みへとつないでまいりたいと思います。

が、今回の学びを通して、私の足元はやはりこの故郷につながっているのだとあらためて感じました。遠くにおいても、この土地の歴史や人々の思いの延長の中に自分があることを心にとどめながら、いただいた学びをこれからの歩みへとつないでまいりたいと思います。



▲大竹貫一



▲高橋竹之介展示館見学の様子2



▲高橋竹之介展示館見学の様子1



▲大竹邸記念館での集合写真



▲大竹邸記念館見学の様子

〈視察研修会②〉

「長善館門下生と大河津分水路を訪ねて」

串田修平

長善館門下生と大河津分水路建設は切っても切れない密接な繋がりを持ちます。大河津分水路建設の軌跡を辿れば、その建設に携った幾多の名士、技士達の経歴から長善館の名が浮上ります。

三年一作と言われた越後平野の米作りは、洪水治水との斗いでした。真に大河津分水路の建設は、良寛に見い出された鈴木文臺が長善館を開塾した事に始まると言っても過言ではありません。

そこで今般は、長善館門下生で大河津分水路に関った二人の達人にスポットを当てて視察研修の成果を紹介したいと思います。

―高橋竹之介の事跡へ―
一八四二―一九〇九（天保十三年―明治四十二年）

旧中之島村杉之森に生まれた竹之介は、尊王攘夷運動に奔走し、戊辰戦争（慶応四年）では京都で

越後鎮撫使となり、越後で方義隊（後の居之隊）を結成して会津まで転戦しました。明治十四年、長岡で「誠意塾」を経営して、六百人余りの優秀な人材を育てました。

明治二十九年の横田切れの大水害で、苦難に喘ぐ人々を救う為、大河津分水路の開削を唱えた「北越治水策」を元老山県有朋、松方正義に建白し、大河津分水路の着工に向けた大きな力となりました。（高橋竹之介展示館資料より）

―大竹貫一翁小伝へ―
一八六〇年―一九四四年（安政七年―昭和十九年）

貫一は南蒲原郡中之島村に生まれ、長善館門下生で漢学を学びました。

少年時代、若月元輔などから漢学を学んだ後、新潟英語学校に進み、土木工学を専攻して治水に関する知識を学びました。明治十三

年（一八八〇）中之島村議会議員に当選し、県議議員を経て明治二十七年（一八九四）に衆議院議員に初当選し、その後十六回の当選を果しました。

政治活動の間は、国県道の新設、改良や治水、利水に力を注ぎ刈谷田川の改修のほか、大河津分水路の建設には私財を投じ、越後の住民を水害の脅威から守りました。

貫一は、「名誉や利益を求めず、信念を曲げず、常に国と郷土の発展のために尽くした姿勢は、人々の信頼を集め、今も郷土の誇りとして語り継がれている」（大竹貫一邸記念館資料より）と、その功績が称えられています。

さて明治初期・中期からの困難を経た国家プロジェクトである大河津分水路は、一九二二年（大正十一年）通水以来今日迄百年有余脈々と流れ、語り継がれ、越後平野を守り続けています。

先人達の苦悩と苦勞に敬意と感謝の念を捧げると共に、真に「百年の計は教育に有り」とつくづく感じさせられる事跡です。



▲信濃川大河津資料館見学の様子



▲昼食

●長善館小話●

長善館中興の祖柿園

楊軒の長男柿園は、顔色が白くて身長が高く、温和で誠実な人柄でした。幼少から優れており、祖父文臺が我が家を興すのはこの子であると期待していました。また柿園も、私塾を継いで日本固有の国体を発展させる学問を構築したいという使命感を持っていました。そこで、東京に遊学して近藤真琴の攻玉社で学び、ついで中村敬宇の同人社で洋学を学んで学問は大いに進みます。柿園は一般の洋学者とは違い、忠孝や仁義の道を固く守り通す人でもありません。二十二歳の時、父の眼病を聞いて帰郷し、そばで細心の看病をしました。

その後、西蒲原中学校に着任して授業をする。親たちの評判は良く、さらに柿園の勉学意欲も高く、再び上京して中村敬宇の門に入りました。卒業後二十五歳の時に帰郷し、長善館の塾則を改正して英学の教員として授業しました。柿園の優れた指導法を聞いて、遠くの地域からも多くの入門者が集まり、柿園は長善館の隆盛に大きく貢献したのです。



▶柿園

長善館関連書籍発売中!!

「明治東京の書生社会

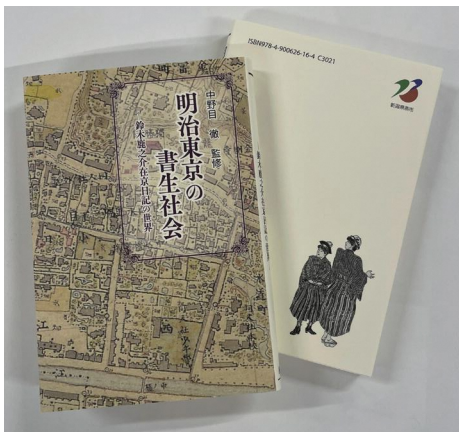
—鈴木鹿之介在京日記の世界—

中野目 徹 監修

長善館の教師であった鹿之介(柿園)が東京遊学中に記した日記を翻刻した書籍を刊行しました。鹿之介が実見した最新の学問や東京の様子、丁寧に記された日常生活などから、当時の日本社会全体の近代化が読み取れる書籍になっています。

〈販売場所〉

燕市中央公民館、燕図書館、吉田図書館、分水図書館、燕市役所売店



▲明治東京の書生社会

長善館友の会
新年度会員募集

長善館友の会は、随時会員を募集しています。

・年会費：個人 五〇〇円

・事業所一〇〇〇円です。

年齢・市内外問わず誰でも大歓迎!

入会に関する詳細は長善館友の会事務局まで。

※住所変更・退会等のお問合せも事務局まで ☎0256-92315400



2代目館主 楊軒

編集後記



本年度は、新規会員が8名であり、長善館に関心がある市外の方からもご加入いただきました。

着実に当会の活動が広がっていることを実感しています。

こうした活動は、会報で皆様にお知らせするだけではなく、燕市ホームページで情報を更新しておりますので、ぜひそちらもチェックしてみてください。

【HPのURL】

https://www.city.tsubame.niigata.jp/bunka/bunka/1/2/17027.html

▼燕市ホームページはこちら



発行 長善館友の会

事務局 燕市長善館史料館内

〒九五九一〇二七

新潟県燕市粟生津九七番地

電話 〇二五六―九三一五四〇〇

●一般印刷●名刺●はがき●封筒●書籍●刊行物

真滝プリント

〒959-0242 新潟県燕市吉田大保町 2-13

TEL. 0256-92-7820

